

郷土室だより

第127号

平成19年2月20日

編集・発行

中央区立 京橋図書館

東京都中央区築地1-1-1

電話 3543-9025

刊行物登録番号 18-031

「変りゆく都市像」(6)

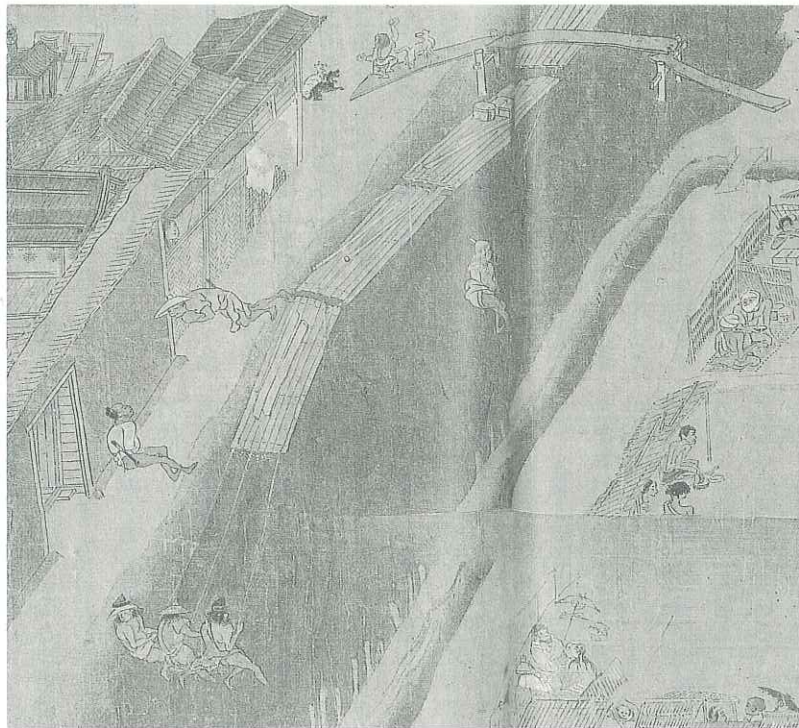
◇川 の 役 割

前号に引き続き今号も「福岡市」の全体的な描写を眺めることにする。はじめは前々号で『一遍上人絵伝』(日本の絵巻 20巻・中央公論社刊)の中の「福岡市」の左上の部分の説明し、前号では全体的な画面、今号ではまた部分に戻って画面の下端部の紹介である。

このような視線の不統一の理由は、原画の複製である「日本の絵巻」が悪いのではなく、それをモノクロのコピーでこの印刷物に掲載しようとする、表紙のスペースの関係で、十分なレイアウトが出来ないためである。

このことをお断わりした上で、あらためて前号「福岡市」の最下部の、吉井川(備前国岡山県岡山市東部)の川岸に成立した「いちば」の有様を説明していこう。

最下部の川の部分には荷を満載した舟が着岸しようとしている。川岸には二艘の空舟が繋がれている。うち一艘には権だけ残して無人であり、一艘にはこれも白衣に烏帽子姿の男が、舟を岸に繋げようとしている。



「一遍上人絵伝」(堀川の部分)『日本の絵巻 20巻』(中央公論社刊)より

川岸には形ばかりだが人の手が加わった跡が描かれている。これが吉井川の中心的な湊の施設だったのである。

川岸を上がった所の右側に大きな「備前」の焼き物である壺が約一〇個も並ぶ軒の低い倉庫がある。この大壺に何を入れたかは不明だが、内容には大きな興味がそられる。

はなしが飛ぶが、現在は「団塊の世代」の「自分さがし」の一つの手段として、「作陶ブーム」がかなり長く続いている。

作陶には古来からの薪を燃やす窯から、電気窯まであるが、いずれにしても多量の二酸化炭素を発生させながら、実用には程遠い焼き物を量産している状況がある。

そんな次元とははるかに遠い十二世紀の「備前焼」の大壺の出現は、まさに生活と流通に革命的影響を与えた利器であっただろう。

話をもとにもどして、その左にも軒の低い建物が見える。壺の場合同じように倉庫だったのである。近世つまり江戸時代の多くの版画に描かれた都市の繁昌を示す風景に、川岸に沿って倉庫が建

ち並ぶ画面が「定型的」といっても良いくらいに描かれているが、その大都市の「いちば」風景の原形が、このような形で見られるのである。

この壺倉庫の右端に「童姿」の少年二人が一遍と武士の言い争いの現場目指して駆け出す姿も見え、平家全盛の時期に都の市中に多くの「童」を放して、市中の情報を収集させたことが良く知られている。未成年の童（髪型が違っていた）を、どこへにも入らせて、いわば大人の世界を覗かせて市民の動向を探ったのである。童に限って身分差がそれほど厳しくはなかったという時代の特徴もあったことが、「都の童」の横行を許したのである。

それはとも角として、多数の人が集まる「いちば」での喧嘩は、大きな見物人の輪を造り、それ自体が貴重な情報であり、同時に娯楽でもあった。へ物見高いは人の常へは、近世の江戸っ子だけの特徴ではなかったことを証明する一こまが、さりげなく挿入されているのである。

◇堀川風景

やっと今号の表紙の絵に入る。

この絵も『一遍上人絵伝』の一齣であって、絵に即して説明すると、左側で三連の筏を曳く人は三人が川の中にはいつて曳き、二人が川沿いの道路の上から曳いている。後続のもう一つの筏を曳く一人も川の中に入って曳いている。『絵伝』で見ると堀川はあまり水量もなく、川幅も平均で十メートルくらいに描かれている。水深も浅く人の脛どころか踝（くるぶし）ほどにしか描かれていない。そもそも堀川は自然河川か人工水路かという自然地理学上の見解も幾つかあるほどなのだが、そのことは改めて述べる。

この川が初期の京都、つまり今から約一二〇〇年前に桓武天皇が開いた平安京のほぼ中心を流れていた堀川である。現在の堀川は大半が埋め立てられて姿を消してしまっただけに、北は今出川通りと堀川通りが交差する地点の白峰神社の南から二条城前へ西本願寺前までの間の所々に、かつての川の名残が残されているが、『一遍上人絵

伝』に見るような状況は想像もつかない。

『絵伝』に見るような材木輸送風景は、桓武天皇の平安京建設の際から始まったとされる。加茂川の原形である川が当時の朱雀大路辺を中心に流れ、その川筋には丹波・山城、さらには遠く土佐・瀬戸内からの材木を扱う商人が集まったとある。

前に述べたようにこの『絵伝』の成立は十三世紀末と推定されていて、本号の表紙絵の説明としては「近江や丹波から堀川に運ばれてきた材木の運搬風景」であり、五条堀川には材木市が立ったと記録される。

ここでことさらに京都以外の地方から運ばれてきた「材木」と五条堀川の「材木市」と書き分けたのは理由がある。

『絵伝』に描かれた筏の材料は木の皮は剥かれ、両端も切り揃えられた形に描かれている。つまり原材である樹木を切り倒しただけの「材木」を、加工して商品としての「材木」を運んでいる風景を描いているのである。

それより約一五〇年後の長祿三

(二四五九)年には、祇園社に属する神人の名義で堀川十二町の商人が材木座を結成して大いに栄えたという。

このような状況を関東地方の場合に対比させると、堀川に材木座が出来た二年前に太田道灌が江戸城を築城し、その城下町は「東武の一会」と呼ばれるほどの都市を形成していて、当時の国際貿易の拠点であったことが『江亭記』などに記録されている。

また幕府所在地としての鎌倉の滑川河口の海岸にも材木座が設けられ、その地名は現在でも健在である。

はなしを江戸時代の京都・堀川に移すと「堀川材木座」結成から約三〇〇年後の宝暦十二(一七六二)年刊の『京町鑑』を見ると、堀川筋の材木町として次の町名が挙げられている。

「堀川中立売下ル富田町、同上
長者町下ル式町目、同下長
者町下ル三町目、同出水四町目、同下立売下ル五町目、同
榎木町下ル六町目、同丸太町
下ル七町目、丸太町ほり川ひ
がし入丸太町」

の八町である。

注「京町鑑」吉田鈍永著。なお京都には江戸時代出版された地誌・案内記などを殆ど網羅した「京都叢書」がある。『京町鑑』が採録されていることはもちろんの事である。その後、この叢書は再三補編が行なわれて初めの十六巻が、『新修京都叢書』になると二十巻に及ぶ京都の百科事典である。その中にも前出の「童」と同じ意味をもつ「京童」・「京雀」・「京羽二重」といった題名を付けた本が目立つのも一つの特徴であるといえる。

現在も堀川第一橋という名の石橋がある「中立売」をはじめ「下長者町」・「下立売」・「丸太町」などの町名は道路名として残っているのを見ると、都会における「いちば」の記憶は強烈なものがあつたことがわかる。

京都には今でも、榎木・丸太といったかつての材木座の名残の地名があるが、江戸には日本橋から京橋にかけて本材木町が九町目、日本橋には旧石神井川の河口であ

った東堀留川に沿って新材木町が出来、神田にも竜閑川沿岸に材木町があつた。

江東地区には公儀の材木置き場の意味での木場(木置き場)深川の富ヶ岡八幡宮の東側一帯)があつたが、後に民営化して公儀の木置き場は猿江(現在の江東区)に移されている。

現在は町名としては木場と新木場(戦後の埋立地)が場所を変えてあるだけである。

京都の山城盆地の中の一二〇〇年間の変化と、江戸の臨海部の四〇〇年間の激しい変化は、日本の大都会の「水辺」に共通な状況であることがわかる。

◇都会の河川名の比較

京の堀川の原形は加茂川(鴨川)

であつて、後白河上皇の「意のままにならぬ」ものの代表的な存在だった加茂川の原形としての堀川は、洪水の度に少しずつ東側に移されて、現在の東山の西麓を流れる鴨川の河流になつていたのである。

これを江戸の場合と比較する

と、江戸の「母なる川」は平川と呼ばれていた。その名は現在の皇居東御苑の北門として使用されている平川門の名に残る。その門前の濠の場所がその河口であり、現在のJR浜松町駅あたりを入り口とする日比谷入江と呼ばれた細長い入り海があつた場所に平川は流入していた。

平川は現在はその下流部の一つで、旧称・外濠川(江戸城の外堀と民生用の運河を兼ねた)、それと現在は日本橋川と呼ばれる水路と、江戸初期に今の飯田橋付近からその放水路兼運河として造られた神田川に分かれているような変化をしている。

しかし、そのような変遷を地図や文章で現地を良く知らない人に説明し、納得してもらうには大変な手数がかかるのである。

京都の場合の堀川、つまり人が掘った川のように呼ばれている現象は、どこの都市でも共通的で、名古屋市内を流れる堀川もその好例である。名古屋の場合は慶長十五(一六一〇)年に、徳川独自の名古屋城建設に際して福島正則が、熱田の浜との連絡運河として

掘ったのが最初だとされるが、そうした沖積地内に運河が造れる状況とは、そこに小規模な自然の水があつて、堀川工事はそれをタネにして行なわれたと見るほうが自然である。

大坂（明治以降大阪と文字を変えた）は、極端に言えば豊臣時代と徳川時代とは同じ都市とはいえないくらいに大きく改変されている。堀川でも徳川の大坂城を中心に西横堀川・東横堀川が南北に付けられ、旧淀川（本来の淀川・河口部は安治川と呼ばれたりする）の中之島に沿って北側に堂島川・南側に土佐堀川、東西の横堀川・長堀川を通底するように道頓堀川などの「堀川」の付く人工河川が縦横に通じる。

これも繰り返すように大坂城のある上町台地から西に広がる沖積平野の、「水抜き」兼「舟運路」として計画されたもので、その結果として市街地が造成されたのだが、この地形変更のすべてが人工だとはいえない状況で宅地化が進んでいる。

◇カナルとリバー

京都の堀川の水量が人の踵を濡らす程度の貧弱な「川」であることと同じ状況の一例を紹介しよう。

資本主義の発祥地である大英帝国の繁栄は「七つの海を支配し、その領土には太陽の没するところが無い」と謳われた。その最盛期ともいえる一八五八年（安政五年）当時の資料、例えば「イングラントとウェールズの内陸運河組織が最も拡張された時の状態図」という有名な図には約一五〇年前の二七系統に及ぶ運河のネットワークのあり方が示されている。

その当時の河川の分類は「広い運河」、「狭い運河」と、ただの「川」という分類（訳文はこのような直訳的な日本語）に分けられ、それぞれ微に入り細にわたってその輸送能力が表現されていたりする。また当時はイギリスでは「ハイウェイ」とは運河と同意語であつたこともわかる。

「狭い運河」の実例を一つだけ挙げると、船から荷物を樽に詰め替えて、幅二メートルたらずの水路をヒトに引つ張らせるといふもの

までが、立派に「運河」の数のうちに入れられていた。規模の大小ではなく採算の取れ方が効果的であれば実用的であつたのである（この辺の資料の出所が余りはつきりしない個所は、確か一九五〇年代に筑摩書房から刊行された『技術の歴史』（五、六巻本・原著者・訳者失念、当時の不完全な湿式のコピー……それを私が書庫に紛れ込ませてしまったのと、私のノートによる。それゆえに参考にした資料を具体的に明示できないが、記事の内容が内容なので鮮烈に記憶している）。

また、この本が取り扱つた時期とほぼ同時代を取上げた『イギリス社会経済史地図』（レックス・ポウブ編・米川伸一・原 剛共訳・原書房・一九九一年刊）にも当時の河川利用の大略が掲げられている。この本の図版にも凡例に「広い運河」、「狭い運河」、「川」とある図が掲載されている。

『絵伝』の筏のような水に浮く運搬物は、船と同じことで長大で嵩高であればあるだけ水上輸送には効率的なのであり、イングラントの樽入りの荷物と同じように、「ア

注 アルキメデスの原理

固体の全部或は部分を液体中に浸すと、それが排除すると考えられる液体の重さに等しいだけ、見掛けの重さが減ずるといふ法則（ここでは話題が日本の近代以前のことであつたので、意識的にアルキメデスの法則については『広辞苑』（第一版・昭和三十年〈一九五五年〉八月刊）より引用した）。

鈴木理生